

天才は雑音を嫌う、加齢も雑音を嫌う

話題の類い稀な少年棋士は、TVを観ない。
大きく開いた新聞紙面を全体を鳥瞰図のように読む。
棋譜の研究はコンピュータで行っている。
ノイズ(雑音)をカットし、効率よく欲しい情報だけを拾っているのだろう。

最近の若者は本を読まない。
彼らの周りには常にメディア・音楽が空気のように流れている。
彼らに必要な情報はスマートフォンの上でネットを介してやりとりされる。
読書の習慣など、既に薄れてしまったようだ。

加齢の読書人は、濫読はしなくなる。
好奇心を擽られる対象が狭くなって来るからだ。
それでも、活字は、人生の友だ。
若い頃は、新聞も雑誌も単行本も手当たり次第に濫読し、
本棚に読書した本を並べては、心を落ち着かせていたものだ。
学生とはそうしたものだ。
そして、齢を重ねても読書量が減ることはない。
じっくり読む精読派に変わってくる。

たいていの本はネットで購入する、雑誌もネット購読する。
近くに書店がなくなってしまったからだ。
街に本屋が消えたのは、ネット通販のせいだ。
早くて便利なのだが、本を手にとり購入するかどうか考える楽しい時間は得られない。

さて、読書人であってもネットから取り出す情報量は半端ではない。
専門領域に限らず、国際問題、・環境問題なども常に見渡せる位置にいることに拘っている。
科学の情報は、常に、SA、Nature、BBC Scienceなどネット購読でフォローしている。
この辺りが、専門家たるところだ。

一方で、新聞は購読しない。
週刊誌や娯楽雑誌は、先ず手にすることはしない。
TVのバラエティ番組は興味がない。
国営放送のニュースにも、おや?! という違和感を覚えることが少なくない。
明らかに偏向した内容や作為を感じると、精神衛生上よくない。

余談だが、ドラマも映画も落ち着いて観ていられない。
人を欺いたり犯したりというステレオタイプなシナリオには、嫌な気持ちにさせられる。
奇をてらった作品や文学作品ではなく、観終わった後の幸福感を期待している。

連続ドラマのエンディングに、幸福感を味わえるシーンを多くとれば、視聴率は上がる筈。知的好奇心を掻く科学番組であっても、矮小化されたトピックを見つけると、もういけない後の情報はすべてノイズになってしまう。

加齢は、好ましくない情報、欲していない情報を聞き流す許容力をなくしていく。

ノイズの話しに戻そう。

ネット社会におけるノイズつまり雑音の量の多さは活字の時代に比べようがない。

つまり、嘘の情報、いい加減な情報、古い情報が溢れている。

2016年米国大統領選挙で、一般の人もフェイクニュース問題を少し認知してきたと思う。

私も、古い情報を鵜呑みにして、講演で恥をかいた経験がある。

故に、情報は、できるだけ発信元に近い情報を原語で見つけ出す努力を怠らない。

海外ニュースソースといわれる発信社の記事は、先ず、疑って読む。

国内ニュースに翻訳されたものは、なおさら信用しない。

英字新聞も所詮は国内ニュースだ。

言語力がそれを助ける。

身の周りに溢れるノイズが気にならないひとは危ない。

ネットの情報に触れるには、情報リテラシーが求められる。

それでいて、ネットからは、活字に比べ格段の速さで必要な情報を取り込める。

20年分の内外の研究課題情報を1年で苦もなく得ることができる。

効率という点では、現代の環境は優れている。

ところで、天才は、ほとんどのノイズに興味がない、近づかない性癖がある。

秀才は、ノイズを効率よく排除するリテラシーを持っている。

凡人は、ノイズの影響を受け続けて右往左往している。

そこで、加齢は、好奇心が狭くなることで、ノイズから逃れている。